

Title	シナリオライターとしての寺山修司 : 『乾いた湖』の分析を中心に
Author(s)	横田, 洋
Citation	演劇学論叢. 2003, 6, p. 154-165
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97540
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シナリオライターとしての寺山修司

——「乾いた湖」の分析を中心に——

横田 洋

序

『愛と希望の街』脚本監督大島渚。『彼女だけが知っている』脚本監督高橋治（脚本共作田村孟）。『恋の片道切符』脚本監督篠田正浩。『死者との結婚』脚本監督高橋治（ウィリアム・アイリッシュ原作、脚本共作田村孟）。『青春残酷物語』脚本監督大島渚。『ろくでなし』脚本監督吉田喜重。『太陽の墓場』脚本監督大島渚（脚本共作石堂淑朗）。『乾いた湖』監督篠田正浩（原作樺場英治、脚本寺山修司）。『悪人志願』脚本監督田村孟（脚本共作成田孝雄）。『日本の夜と霧』脚本監督大島渚（脚本共作石堂淑朗）。『血は乾いている』脚本監督吉田喜重。『武士道無残』脚本監督森川英太郎。『非情の罟』脚本監督高橋治（脚本共作国弘威雄）。

以上のリストは松竹ヌーヴェル・ヴァーグの当事者であったシナリオライター田村孟が後年松竹ヌーヴェル・ヴァーグと正確に呼べる作品は一三本であるとして挙げたものである。松竹ヌーヴェル・ヴァーグとは一九六〇年松竹映画の特に大船撮影所の若手監督が次々とデビューし、従来の松竹大船の伝統とは全く異なる新しい感覚の映画を制作していた時期の作品やそうした潮流のこ

とを言う。しかし六一年からは松竹はヌーヴェル・ヴァーグ路線を中止し、従来の伝統的なメロドラマ、ホームドラマ路線へと回帰したため、松竹ヌーヴェル・ヴァーグとはいっても実は一年に満たない短い期間のことであったのである。年代的にも内容的にも実際に松竹ヌーヴェル・ヴァーグと呼べるものとして田村が選んだものが以上の二三本なのである。

田村は「煩をいとわず文字を連ねたのは、『乾いた湖』以外すべて監督の発意によるオリジナル・シナリオであることを示したかったからである。」と書いている。つまり本家フランスのヌーヴェル・ヴァーグと同様に監督（作家）の映画であることが松竹ヌーヴェル・ヴァーグの特徴であったと田村は論じている。その中で唯一の例外が篠田正浩監督の『乾いた湖』であり、そのシナリオを書いたのが寺山修司なのである。監督がシナリオを書くことが特徴であった松竹ヌーヴェル・ヴァーグのなかにあって、寺山修司は唯一のシナリオライターであった。

寺山修司の映画における業績は、「田圃に死す」などに代表される七〇年代以降の作品であるが、六〇年代前半にはシナリオライターとして活躍していたことも忘れることができない。寺山はシナリオ作家協会に所属し、六一年からはそのシナリオ作家協会が編集をする雑誌『シナリオ』の編集委員をしていた。六〇年代初期には本人の肩書きに「シナリオライター」が使われることもあったほど、映画のシナリオ執筆が寺山の仕事を中心になっていた時期もあった。

この論文では寺山修司がシナリオを書いた『乾いた湖』を中心に、シナリオライターとしての寺山修司を論じていきたい。

一 シナリオ執筆に至る経緯

当時映画業界では無名であった寺山修司にシナリオを依頼した動機については監督の篠田正浩自身が詳しく語っている。篠田は「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」という寺山の短歌に感動したのだという。「この歌を発見したときの驚愕を今も忘れてはいない。私のなかで完全に滅び去ったと思っていた短歌が、その強固な形式と古色な風雅のため到底受け入れ難い現代の《新しさ》を突破して生命を甦らせたのである。それまで短歌は、私や私の同時代人には皇国史観を賛美するための靈力を備えていた。柿本人麻呂に始まり本居宣長や吉田松陰の絶唱に、私は自身の運命を放棄して見えざる神に投身誘惑のリズムを感じとっていた。しかし、その甘い死の匂いも八月十五日の事件で雲散霧消してしまつたのだ。以来、短歌は醜い廢墟のような姿をさらけだし、時代遅れの形式で死の誘惑をしたことに私は嫌悪と憎悪を剥き出しにしていた。その短歌が、私より若い世代の青年によって甦つたのである。青森県の僻地から上京してきた青年の気負いが小さなマッチの先の炎に祖国の残映を見る、その視点のテロルな不気味さは私が知っていた短歌の先入観を完全に破壊する響きをもっていた」と篠田はその時の感動を記しているが、こうして篠田は「寺山のコトバで映画をつくることを思い立った」のである。篠田は寺山の言葉を使うことによつて寺山が短歌という形式でそれを行ったように、映画というジャンル、形式に於いても先入観を破壊するような全く新しいものを作り上げよ

うと考えていた。

実際の篠田と寺山のつながりは、当時の篠田の夫人であった詩人白石かずこを通じてのもので、白石は北園克衛の詩誌『VOU』を通じて寺山を高く評価していた。寺山は詩人仲間の谷川俊太郎の勧めでラジオドラマやテレビドラマのシナリオの執筆を始め、ラジオドラマ『中村一郎』では民放祭連盟会長賞を受賞するなどラジオやテレビのジャンルでも活躍を認められていた。一九六〇年には劇団四季に戯曲『血は立ったまま眠っている』を提供した。同じ年東宝からもシナリオが依頼され、『一九歳のブルース』を書いたが、これは結局映画化はされなかった。つまり篠田はいくら短歌に感動したからといって、突然歌人にシナリオ執筆の依頼をしたわけではない。

また『乾いた湖』のシナリオは神楽坂の旅館に篠田と寺山が二人で泊り込んで書いており、田村孟があげた松竹ヌーヴェル・ヴァーグのリストのうち唯一シナリオライター単独の脚本となつているが実際には監督との共作だと考えられるが、シナリオに寺山の名がクレジットされていることから、着想その他の大部分を寺山に負つたものだと考えることができよう。

『乾いた湖』は直木賞作家榎場英治の同名の新聞連載小説をもとにしていて、オリジナル・シナリオで撮つた篠田正浩のデビュー作『恋の片道切符』は社内での評判はよかつた。しかし逆に評判が高かつたことが災いし社長城戸四郎が直接試写会に出向くこととなり、そこで城戸が篠田の映画を理解できなかったために、篠田は一度助監督に降格となつていった。会社側は直木賞作家の榎場英治の小説を映画化することを条件に篠田の監督復帰を認め

る。そこで篠田は脚本に寺山修司を起用し、原作とは大幅に異なる作品を作ろうと試みたのである。

二 喜劇としての『乾いた湖』

まずこの『乾いた湖』の物語を明らかにしておこう。

財閥の御曹司木原道彦の別荘で若い男女が快楽的な遊びに耽っている。しかし、そのうちの一人桂葉子に電話が入り、葉子は東京の自宅に戻る。葉子の父が自殺したのだ。自宅での葬式に、自覚の大瀬戸五郎が焼香にやってくる。葉子は新聞記者に農産公社の部長であった葉子の父は汚職事件の責任をとらされ、大瀬戸に自殺させられたのだと教えられる。

木原の別荘に遊びに行っていた下条卓也のアパートの部屋にはヒトラ、ムツソリーニ、トロツキーなどの写真がコラーージュ風に貼ってある。卓也はさらにカストロの写真を貼ろうとしている。そこへ節子が入ってくる。卓也は節子をベットへ引き倒し、「指導者にはマークが必要なんだ。太く濃い髭だとか、大きなほくろだとかがね」と言う。節子と卓也は大学へ行くが休講の掲示が出ており、喫茶店「ジュピター」へ行く。「ジュピター」には既に咲子と美代子があり、節子とともに卓也を遊びに誘うが卓也は興味がない。美代子は月一万でいいからパトロンが欲しいと卓也に相談する。

バー「ラ・ドンナ」で卓也はマダム文枝に大瀬戸を紹介される。大瀬戸は大学の自治会の委員でもある卓也に政治の話を持ちかける。大瀬戸は日本人はもっと民族意識を高めなければならな

いのだと言うのだが、卓也は「民族意識なんて概念を全然信じていないんです」と返す。卓也は大抵の学生は「金が欲しいし、いい女と寝たい。だからそんなやつら、つまり自家用車に乗って若い女をつれてゴルフへ行くやつらを見ると、そいつらを殺すか、そいつらになるかの二つしか考えない」と言う。そして大瀬戸に月一万で女子学生を紹介すると持ちかけるのだが、とりあつてくれない。酔った卓也は文枝の家に連れてこられ、文枝とともにシヤワーを浴びる。翌朝、卓也は「浮気したくなった」と文枝の財布から札を抜き出す。文枝は「お金ならいくらでもあげるからどこにも行かないで」と懇願する。

卓也は大学の自治会の委員会に出席する。「民主主義学生連盟」に加盟するか否かで議論になっている。会合の後ジュピターで委員の一人の水島は木原道彦と仲のいい卓也に就職のコネをつけてほしいと頼む。水島は道彦に会いに行くが、水島の就職を断られる。

葉子の姉はずえは婚約者の藤森信一に婚約を破棄される。汚職管理の遺児とは結婚できないと言われたのだ。葉子は卓也に姉の話をする。それを聞いた卓也は葉子を「アル中」の韓国人ボクサー鄭方現を紹介する。鄭に藤森を殴ってもらうのだ。しかし鄭は殴るだけでなく、剃刀で藤森の顔を傷つけてしまう。

大学の自治会は安保のため渡米する首相を羽田で阻止することに決めるが、その場で卓也は自治会の金を遊興費に使っているとして委員の役職を解かれる。卓也は自分から自治会は止めると言い、安保を反対するのはいいが、そのためにアメリカが経済封鎖をしたら日本はやっていけないとして、「おれの政治に対する考え

方にはもつと独自の……おれのやり方があるんだ」とはき捨てて出ていく。安保反対のビラがまかれる大学の構内を通って卓也はアパートに戻る。卓也のアパートの窓からはラグビー部の練習が見える。呼笛を吹き号令をかけるキャプテンの指導ぶりに卓也は魅入る。次々と選手の数が増え、いつのまにか指導しているのは卓也になっている。ふと目をあげると壁にビトラの写真がある。節子から電話があり、卓也は節子とジャズバーへ遊びにいき、ホテルで節子と寝る。

ホテルの一室で大瀬戸はしずえに封筒に入った金を渡す。しずえは家計を助けるために、父の仇である大瀬戸の愛人になっていた。その晚しずえが母のあきに金を渡しているところだしずえが大瀬戸の愛人になった事実を葉子に知られてしまう。

木原道彦の誕生パーティーで篠山貴子は父の会社のために道彦に何でも言うことを聞くから二〇〇万円融通して欲しいと頼む。それを聞いた道彦は二〇〇万の小切手を用意しパーティー会場で貴子に服を脱ぎ、部屋を一周して、歌を歌えと命令する。パーティー会場を抜け出した卓也は別室で葉子に会い二人で外に出る。卓也は葉子にラングストン・ヒューズの詩を読んで聞かせ、自分は青森県出身の妻の子だと言うのだが、それはまっかなうそだと言う。葉子はそんな卓也にさみしいんでしようと言い、二人はホテルに行く。ベッドの上で葉子はヒューズの詩を口ずさむ。

一九六〇年五月、安保反対のデモ隊が大合唱している。葉子は家を出て自立するためにバーや料理店で仕事を探すが、断られる。卓也は大学で自治会の委員達と出会う。卓也は「デモに行くやつらはみんな豚だ。豚は汗かいて体こすりあうのが好きだからな。

豚には自己主張もない」「政治なんてのは議会制じゃ何もできなくなっている。だからといってデモなんかやったつてもつと非力なんだぜ。政治がどうして出来上がるかってのはおれが教えてやる。いいか、おれが今後することを覚えて、せいぜいみんなでまねするがいいぜ」と言い放つ。水島が自殺したと聞いた卓也は水島のアパートに行くが、その帰り、葉子とはったり会う。葉子はあのとときの夜のことは忘れろと言い、ヒューズの詩も忘れたと言つ。

卓也はアパートの裏の建設用地で自作ダイナマイトの実験に成功する。アパートに帰ると節子がいる。節子は卓也の子供を妊娠したと告白するのだが、卓也は革命的な行動のためには女にかまっつているひまはないと言つて部屋から出て行く。卓也が「ラ・ドンナ」に行くとき大瀬戸が飲んでいる。大瀬戸は内閣を倒せるのは与党内の良識派と財界だけだと言うが卓也は政府を倒すのは力だと言う。そしてマダムの文枝との肉体関係を終りにすると言い、大瀬戸にどっちが先に内閣を倒すか競争しようと言う。

葉子は道彦に就職の世話を頼みに行く。道彦はたのしむ女には金はいくらでも出すが、泣く女には一銭も出せないと言い、葉子を抱こうとするが、逃げられる。デモ隊に巻き込まれた葉子は肩を組まれ涙ぐんで一緒に「インターナショナル」を歌い出す。国会前でデモ隊の波をかきわけてダイナマイトを持った卓也が国会内に突入しようとするが、警官隊の放水の前に転倒する。デモ隊と警官隊の乱闘が始まる。国会前の負傷者のなかに卓也もいる。大学の自治会のメンバーがなつかしうに声をかけるが、卓也は屈辱で顔をそむける。学生たちとともに卓也も救急車に乗せられるが「あいつらなんかと一緒にしないでくれ」と叫び、救急車の

なかの学生を睨み「おまえらなんかと、おれは違うんだ」と一人救急車のなかに唾を吐く。

以上が『乾いた湖』の物語である。

シナリオ『乾いた湖』と原作との大きな相違点は設定されている時代が異なっているということがある。原作では学生の自治会における議題が五〇年代中盤の砂川闘争となっているが、シナリオでは六〇年安保と同時代のものに変えられている。砂川闘争と六〇年安保では学生運動としての規模の大きさが全く異なる。六〇年安保は日本中を巻き込んだ大闘争であり、この時代は特に学生にとって無関心ではいられないほどの政治の季節であった。こうした時代の設定の変更は作品全体に大きく影響を与えている。原作では、自立を目指した葉子は女優となり、映画スターとして華々しく活躍を始めた直後に事故死するのであるが、シナリオでは葉子は自立しようとするがうまくいかず、最終的にはデモに参加するとなっている。また原作では、卓也はテロリスト的な要素は全くなく、ただ自治会に入っただけながら放蕩を続けるニヒリスティックな無頼派の学生であり、最終的にはしずえの元婚約者信一への傷害容疑で逮捕されることで小説は終わっている。

シナリオと実際に撮られた映画にも大きな相違点がある。それは、ラストのシーケンスである。シナリオでは卓也はダイナマイトを持って国会内へ突入しようとして、阻まれ怪我を負い、デモ隊の学生と同じ救急車に乗せられる。実際の映画では原作のアイデアを再び取り入れ、卓也がダイナマイトを持ってアパートを出た所で信一への傷害容疑で逮捕され、パトカーで移送されている時にデモ隊に囲まれ、パトカーの中から「おまえらとは違うんだ」と叫ぶ。

以上の点が原作とシナリオと映画との大きな相違点である。主人公の行為が破綻するという点では、ダイナマイトを持って国会に突入してしまうより、部屋を出たところで全く別件で逮捕されてしまう方が、物語の整合性も出て実際の映画の方が挫折感が強く出ているように思われる。しかし「おまえらとは違うんだ」と叫ぶ時の屈辱感はずいぶん強くなる。原作の方が強く出ているだろう。

原作と映画でもっとも異なる点で、この映画をもっとも特徴付けているのはやはりシナリオが六〇年安保の闘争を背景としていているという点である。このシナリオは「デモに行く奴は豚だ」と考えている主人公がヒトラーに傾倒してロを思いつくという物語である。この映画が安保闘争直後の六〇年の八月に公開されると、監督の篠田正浩の斬新な映像感覚が受け入れられ、松竹ヌーヴェル・ヴァーグの波に乗って大ヒットするが、その政治の捉えかたをめぐって批判が集中したのである。

多くの批判があったが、『映画評論』一〇月号の巻頭言での批判に対して寺山は反論している。寺山は「多くの新聞批評の『乾いた湖』への非難が、おそらくこの巻頭言に集約されている」と反論のなかで書いている。

この巻頭言は五〇〇字程度の短いもので署名はないが、中原弓彦の文章である。最初に篠田正浩に対する批判が書かれたあと、「が、なんといつても、いちばんイケナイのは、寺山修司の脚本であることは間違いない。政治というものをああいふふうにとらえる神経がまず許せないのだ」と脚本の寺山修司を直接批判して

いる。続けて「具体的にいうと、今年の五月にテロを思いつめる主人公の部屋に去年の秋からヒットラーの写真が貼ってあったり、警官が主人公を逮捕したとき、彼の持ち物を忘れていったりすることだが、全学連の学生が見るからにグレン隊みたいな格好をしていたり、ファシストに公然と憧れているのも変であるつまりデモ、テロ、セックスといった“現代的な”ファッションを折りこめば、現代を描けるという軽薄な態度が、根本にあるのだ」と述べている。寺山は「現代的なファッションを折りこめば、現代を描ける」という軽薄な態度でシナリオを書いているが、全く現代を描けていないというのが中原の批判である。

それに対する寺山の反論は『映画評論』一二月号に掲載された「瓶詰めの猿論」である。寺山はまず映画批評のあり方に疑問を投げかける。「批評家たちはマスコミの中で、話しあえるための共通の紐をさぐりあてようとして、それを状況によって変革されがちな芸術上の独創よりも、むしろ世直しの社会性の場から批評しはじめている」という寺山は「批評家たちは最近、対立物を同時性で表現し、そこに因果律をもった普通のドラマツルギーによる方法の、ジンテーゼをださなかつた場合に『風俗作品』と思いたがる傾向が非常につよい」と書く。続けて「世直し論理」で作品の主題をはかる傾向がつよい。これはいま、映画批評界に価値体系が確立していないため、世直しの映画の公共性の立場から物を言うのがもっとも易いからなのだろう。しかし、社会をよくすること、秀れた芸術であるということと同義ではなく、映画はHow to Liveの教科書ではないのだ。言ってみれば決定的に社会を墮落させうる作品は、社会福祉の旗になりえた作品と同

様、高く評価しなければならぬ」と述べている。

つまり、映画を社会性や政治性といった尺度でその価値を判断するのではなく、「芸術上の独創」、芸術を自律的なものとして判断するべきだと寺山は主張している。寺山はこのことを六〇年代初期に様々なところで主張している。例えば雑誌「シナリオ」の六三年一月号では大学生の質問に答える形で「僕たちは、たしかに幾つかの闘うべきものを周囲にもっています。しかしそれは必ずしも、常に『政治』を通過せねばならないものではない。芸術に於ける実践の意味は、日常の実践とも切りはなし得るところにこそ自律性があるものです」と述べている。

そして寺山はそうした映画批評のあり方を批判した上で「乾いた湖」は喜劇である¹³ことを強調している。この映画は主人公の行動が最後に挫折するという悲劇的あるいはメロドラマ的な物語として受け取られた。それゆえにファシストに憧れテロを思いつく主人公の行動が英雄的で、メロドラマ的な正義が描かれていると受け止められ、非難の対象となった。しかし、ここで寺山は主人公の行動や思考に観客が感情移入したり、それがそのまま主題になったりするのはなく、主人公の行動や思考が喜劇の一要素として相対化され、客観的に眺められるべきものであると主張したのである。寺山は述べている「したがって『政治』というものをああいうふうにとらえる……つまり、いまあるかたちを一つのテーゼだけに偏重することなく、カリカチュアライズすることとは『許せない』ことであり得ようはずがない¹⁴」。

ほとんどの批評が卓也の行動に的が絞られているのだが、寺山自身は卓也以上に葉子の方に重点を置いている。つまり主人公は

卓也一人のみではないのである。「乾いた湖」では卓也の過激な行動の方向が向いてしまったのだが、実際には卓也と葉子の行動は並行的に描かれている。つまり卓也と葉子というデフォルメされた両極端なこの二人のものの考え方の違いが全篇を通して描かれているのであって、その違いを対比的に強調することによって互いを相対化することで笑いも生まれ、若者を風刺する喜劇になりえているのである。

寺山はリースマンの分類を用いて、葉子は「他人志向型」、卓也は「内的志向型」と特徴付けた。寺山は書いている。「葉子という他人志向型の人間を主人公に彼女の志向する『他人』のパターンをカリカチュアライズすることで主体性のない一人の青春像をかくことが、台本を引き上げた日のほくの意図の一つとなった。彼女は一九六〇年の政治的な季節のなかで、はじめに父を殺した敵というかたちで保守党をにくむ。これはまず非常に個人的な政治への目ざめである。おそらく彼の父を死へ追いこんだのが共産党であつたら彼女は共産党をにくんだにちがいない。そのあと家出から恋愛まで、彼女はリースマンの分類のために生まれた位、極端な『他人志向型』の女で、あのヒステリックな精神状態でなかったらデモに自ら参加したかどうかともわからぬし、あの行進がもし右翼のそれだとしても彼女はスクラムを組んだかもしれないのだ。つまり彼女は欠落したノラであり、他の人物だつてよく見ればどれも観念のなかで裏返しになっているはずだ¹⁷⁾。ここではリースマンの分類とはいっても社会学の用語として厳密に使っているわけではなく、「主体性」がなく他人に依存するような人間として「他人志向型」という言葉が使われている。つまり、自立

しようと考えたのも姉や大瀬戸が原因であつて、自立しようとはしても結局卓也や道彦へ依存しようとするところしかできず、最後にはたまたま通りかかったデモ隊に参加してスクラムを組むというように、結局は徹底して自ら考えようとはせず他人に依存してしまうのである。

こうした極端な「他人志向型」の葉子に対して、卓也は「内的志向型」の人物である。「比較的にはほくの愛していたの登場人物は『内的志向型』のテロリストということになるがそれは現代でもし、他人志向性、伝統志向性を完璧に拒否し、その上でなお社会のなかで生きようとすれば人はテロリストにならざるを得ないという理由によつてである。彼の喜劇は、ヒットラーがワグナーを芸術の次元ではなく日常性の次元で再現しようとして怪物の扱いをうけたように、下条卓也は孤独な夢想家だつたにすぎない¹⁸⁾」。ここでも極端な「内的志向型」は「孤独な夢想家」であるというほどの意味であろう。

この時期寺山は好んでテロリストを主人公とした作品を多く書いている。例えば劇団四季に書いた『血は立ったまま眠っている』は革命のために自衛隊の倉庫を爆破しようとする青年が主人公であったし、映画化されることのない『一九歳のブルース』は新しい右翼政党政成のため、自分でも知らないうちに組合上がりの会社専務を暗殺してしまうボクサーが主人公である。

寺山はヒットラーを「ワグナーを芸術の次元ではなく日常性の次元で再現しよう」したとして芸術家として認めようとしていた。同様にトロツキーのような政治家も芸術家として認め、テロリズムや独裁を芸術として捉えようとしていた。ただ『乾いた湖』で

はヒトラーやトロツキー、カストロといった人物はその具体的な思想や寺山がそれをどのように理解しているかといったことはあまり関係なく、それらは独裁的な指導者の類型として記号的に用いられている。そうしたところは冒頭の卓也の部屋で卓也がカストロの写真を見ながら「髭を生やそうか、と思うんだ」「指導者にはマークが必要なんだ。太く濃い髭だとか、大きなホクロだとかがね」と言うところにも表れている。このように様々なものを記号的に捉え、デフォルメして表現していくことにも、寺山のいう喜劇性が潜んでいると思われる。

『乾いた湖』のなかでヒトラーやワグナーと対比するような形で登場するのがラングストン・ヒューズとジャズである。五〇年代から六〇年代初期寺山は黒人の詩人や黒人霊歌、ジャズといったものに非常に愛着を示していたのである。寺山の六〇年代初期の映画演劇作品のほとんどにラングストン・ヒューズなど黒人作家の引用があり、音楽としてジャズの指定をすることも多かった。ヒトラーのようなファシストに興味を示す一方で、差別され虐げられた黒人の哀歌や白人中心の既存の制度への反発といった主題にも強く惹かれていた。寺山はそうした二面性を主人公の卓也に負わせたのである。作品のなかではヒトラーの写真やワグナーの音楽は昼間かもししくは太陽の出ている時間に出てくるのに対して、ラングストン・ヒューズの詩やジャズは夜にしか出てこない。社会性を強く意識せざるをえない昼間の時間よりも夜の方がより本質的な人間性が現れるのだと示唆しているかのようだ。卓也が葉子にヒューズの詩を一篇聞かせた後「おれは妾の子なんだよ」と語り不幸な過去の一要素として青森県出身であることも自嘲的

に告白する。このセリフは寺山自身の過去ともほぼ重なり、天井桟敷以降の寺山の演劇や映画の主人公とも重なる。ただここでは寺山や後年の作品の主人公と直接重ね合わせるよりは黒人や朝鮮人や地方出身者という存在を社会的に抑圧されたものの記号として使用していると考えたい。しかし、卓也はそう告白した後、卓也の過去に「同情して」と指定される葉子に対して、「なあんでね。ちよつと本当らしく聞こえるだろう。ところが、それはまっかなうそさ」と否定してしまふ。昼と夜を使い分け、卓也の不幸な過去が明かされ、そうした過去に卓也の本性が隠されていると思われるところで、その過去を「まっかなうそ」と否定し相対化してしまふ。卓也の中の二面性は宙吊りにされたまま、喜劇の一要素として笑いの対象にもなってしまうのである。

さらに『乾いた湖』には過去の映画の引用とパロディが含まれているということも忘れてはならない。特に木原道彦の誕生パーティーの場面はシナリオからのみでもフェリーニの『甘い生活』の引用であることが理解できる。従来の価値観に囚われない若者という登場人物は日活のアクション映画やゴダール、大島渚の映画の登場人物を彷彿とさせる。映画評論家の佐藤重臣は「どこかの外国映画の名場面をそっくり拝借してきて、植え替えるようなことを平気でやっている」と述べた上で「だが、このイミテーションも脚色に一枚、寺山修司が加わっていることを思いおこすと、一概に断罪を真向からくだすには、チュウチョセざるを得ないのである。むしろ、ヌーベル・バーグの捏造品をワザと意識して作ることによつて、芸術の高慢さ・孤高さを階段から引きずりおろそう、という意図の下に作ったのではないか」と、そんな気も

おこつてくるのである。とすれば、それは芸術における（スキヤング的要素）として、大いに評価せねばならぬ」と『乾いた湖』のパロディ的要素を積極的に評価している。寺山修司自身も『乾いた湖』を「きわめて意識的にヌーヴェル・ヴァーグスタイルのパロディとしてかいた」と述べている。寺山はいかにもヌーヴェル・ヴァーグ風の登場人物をパターン化し、それらを対比的に登場させることにより、ヌーヴェル・ヴァーグの批評的なパロディを作りだしたのである。

『乾いた湖』のシナリオは寺山自身が述べたように卓也や葉子といった極端な人格を持った人物を対比的に登場させ、一人の人物のなかの二面性を対比させることよつて六〇年当時の若者を風刺した喜劇として受け止めるのが妥当であろう。またそうした対比性、二面性を記号的に捉え表現していくという記号の遊び、引用やパロディといった要素も『乾いた湖』の喜劇性を強くしている。松竹ヌーヴェル・ヴァーグとはいつても寺山の芸術のなかでももつとも商業的な制約の多かつた六〇年代初期の映画のシナリオなかにも、後年の寺山の芸術を特徴づける要素が既に多く取り入れられているということも特筆すべきことである。

三 寺山修司と映画

寺山修司は『キネマ旬報』の六一年二月下旬号のシナリオライター四人による座談会のなかで、なぜ映画のシナリオを書き始めたのか聞かれ、「短歌とか詩とか、活字を通して行為をコミュニケーションすることに絶望した」ということでしょうね。演劇は

それに比べて総合化された言葉を、人間の肉体を通して言わせることはできるけれど、演劇は一回きりのものなんだ。たいへん行為芸術としての性格が強いんで、初日と二日目とではぜんぜんちがつた演劇がで上がる。映画にはその面がないでしょう。金になるということもあるが、やはり言葉によるコミュニケーションを何とか変革したいと思うこと、これが第一ですね」と答えている。また処女シナリオ『一九歳のブルース』が雑誌『シナリオ』に掲載されたときそのあとがきで書いている。「カリフォルニア派の詩人の一人であるフアリンゲッティがかいているように現代の詩人たちは〈グーテンベルグは印刷術を進歩させた。おかげで詩人はひどい目にあつた。猿ぐつわをかまされたつてわけだ〉と自覚している。僕もまた活字の桎梏からのがれて詩をかくことを考えていた訳である。記号としては活字より人の声、人の肉体のほうが興味ぶかかつたし、恒に新しいジャンルが僕を呼びよせてきたのだ」。寺山は自分の書く詩を活字ではなく、人間の肉体を通して表現することに興味をもち、映画や演劇の世界に入つてきたのである。

先の座談会のなかで、出席者の一人の安藤日出男が作り手が観客に一方的に押し付けるのではなく、観客と作り手との対話を可能にさせるためには作品のなかに「脱落」がなければならぬと述べたのに対して寺山は「安藤さんは脱落と言つたが、ぼくはそれをメタフィジックと言いたい」として「メタフィジックをつくるためには、タテヨコの線でキツチリ構成した過去のドラマツルギーではだめです」と因果律を破つていくことを主張し、「映画にドラマなんて必要ないと思つている」と述べている。

また寺山は六一年七月上旬号の『キネマ旬報』に「声の設計・セリフ考」を書いている。このなかで寺山はテレビと映画のセリフの問題点を挙げている。「一、映画において現存欠けている第一の要素は無駄の効用を知ることである。一、更にメタフォアが欠如している。一、類型に堕しているため、あらゆる登場人物にロマネスクがない。つまり言いそうなことしか言わないのである。一、つまるところ、言語はつねに機能性の虜であり、物質としての言語の粘り、硬さがない。映像を越えないし、独自の眩きの書きわけの区分さえない」と現状の批判をした。そのうえで「現代映画では、そうしたドラマチックな葛藤は映像の構成によってなされ、台詞はむしろ無駄なものとして、映像と衝突すべきものである、と考えるようになった」と述べている。また「これは映像と台詞の分離の提唱であり、再構築しての結合の暗示であ」り、「ガガーリンの顔に中島そのみの声をアテレコしたり、力道山の吠え声に小島のなき声をアテレコしたりしながら『言語が不規則さによって体系全体の方則の衝突するダイナミズム』（エイゼンシュタイン）を発見してゆくことをシナリオライターは台詞においてこころみなければならぬ」と主張している。セリフは因果律に則ったドラマを構築するための道具として使われるものではなく、言葉それ自体の魅力でもって映像と衝突させ、また新しいイメージを喚起させるようなものとして用いられるべきだと主張しているのである。

しかし寺山の考えるセリフをそのようなものとして捉えたとしても、『乾いた湖』の物語は完全に従来の因果律に則って進んでいくし、寺山のセリフも因果律に則ったドラマの補完物として機

能していることがほとんどである。映像とセリフの衝突のようなことを主張してみても、映像だけでなく最終的にセリフを演出するのも監督であって、寺山の意図が実現するとは限らないのである。『乾いた湖』での寺山の意図は卓也と葉子の人格を対比的に描いていくことであつた。しかし、出来上がった映画では人格を比較するというよりも卓也と葉子の恋愛や卓也の過去といった感傷的な要素が強く出ており、悲劇的な最後を迎えるメロドラマと受け取られてもおかしくない物語となつてしまつている。

寺山は後年の自注では例えば六〇年に書いた戯曲『血は立ったまま眠っている』を「『いわゆる新劇』の変型であつて、演劇そのものへの根本的疑いをさし出していない」というように六〇年代初期の作品を認めていないのであるが、書いた当初は演劇としてそれなりに認めていた。それに対して寺山は自ら書いた映画を当初から全く認めていないのである。寺山は六一年、「昨年、私はいくつかの創作計画を立てた。一編の長編戯曲、二編の放送劇、テレビドラマ、そして小説、加えて映画と短歌」と六〇年の時点でかなり幅広いジャンルにわたつて計画を立てていたのだが、「映画をのぞいてほぼ予定の成果を収め」、「映画だけが思うようにかかず、私は夏休みの終りを前にして宿題を残している学生時代の、あのいらいらした気分をもてあましていた」のである。「無論、作品の成果について言っているのではなく、意図と結果の間のクレヴァスの大きさについて言っているのである。」と公開直後からほとんど評価していない。『乾いた湖』批判への反論である「瓶詰めの猿論」でも、「乾いた湖」という失敗作についての指摘が、もつと的を得てほしかったと思う」と批判に対して

は反論しているものの自らの作品を失敗作だと認めている。

寺山は「意図と結果の間のクレヴァースの大きさ」の原因のほとんどを映画会社の利益優先の姿勢にあると考えていた。「数多い人に」という発想が企業家にある限り、反抗的な一つの作品、創造的な一つの作品を生むことは難かしい。少なくとも演出家でさえ難かしいのに会社にとつてアウトサイダーである私などにとつては一層難かしいことになる。会社は現状を肯定して、いまある安らぎを守るべき作品のなかからもうけ口を見出すことをやめはしないだろう」と映画会社の姿勢が寺山の独創を阻んでいると考えていたのである。「ヌーヴェル・ヴァーグと呼ばれたフランスの一連の作家たちの何より大きな意味は、かくしどりででもモンタージュ拒否でもなく、企業形態を改革したことである」とフランスのヌーヴェル・ヴァーグが成功した理由をその企業形態の改革にあると考えている。そして「個人の仕事にまで、映画を純粹化してつくりあげるとき、決して公約数を気にしなくともいい作品をつくることができるからである」と映画を作家個人の仕事にするため映画会社とたたかわなければならぬと考えるようになったのである。

しかし六〇年末の大島渚の『日本の夜と霧』事件以降、松竹はヌーヴェル・ヴァーグ路線を中止し、メロドラマ、ホームドラマ路線に回帰し、寺山―篠田のコンビは曾野綾子原作のメロドラマ『わが恋の旅路』（一九六二）や、港湾労働者の世界を舞台にした『ロミオとジュリエット』である「涙を、獅子のたて髪に」（一九六二）といった、「すれちがいメロドラマ」という松竹得意のジャンルで映画を作らざるを得なかった。こうしたジャンルでも寺山

のパロディセンスは垣間見えてはいたが、それらは寺山の意図する映画ではなかった。

寺山は六〇年には『猫学—Calllog』という一六ミリの実験映画を作っており、旧来の因果律に基づくドラマがなくても映画が撮れることを既に知っていた。そうした実験映画と松竹での商業映画の隔たりを埋めようとする努力を行おうとはしたのだが、結局はその隔たりの大きさに絶望し、「涙を、獅子のたて髪に」を最後に五年間にわたって映画業界から遠ざかることとなる。寺山が映画から離れている間、映画業界ではA.T.G.が設立され、A.T.G.が出資することによって低予算ながら、自由な映画制作ができる環境が整えられていた。寺山はその五年の間に劇団天井敷敷を設立しアンダーグラウンド演劇の旗手となっていた。また新しい芸術哲学を手に入れた寺山は六八年に羽仁進監督の『初恋地獄編』のシナリオを書くことを手始めに映画業界に復帰し、七〇年には『書を捨てよ街へ出よう』自ら監督をする。ここで初めて従来の因果律を無視した詩的なイメージの連鎖で映画を制作することが可能となり、後の『田園に死す』（一九七四）や『草迷宮』（一九七九）といった三五ミリの名作、『ローラ』や『蝶服記』、『審判』といった実験映画につながっていくのである。

注

- (1) 田村孟「松竹ヌーベル・ヴァーグの過去帳」『講座日本映画六 日本映画の模索』岩波書店 一九八七年 九〇〜九二頁
- (2) 同書 九二頁
- (3) 松竹大船では他の映画会社と異なり助監督がシナリオを書く練習をするという伝統があった。実際にはほとんどの映画が専門のシナリオ

- ライターによって書かれていたのであるが、こうした松竹大船の伝統が松竹ヌーヴェル・ヴァーグの要因ともなったのである。
- (4) 篠田正浩「寺山修司のコトバ、そして映像」、『寺山修司全シナリオ I』フィルムアート社 一九九三年 三七―一頁
- (5) 同書 三七―二頁
- (6) 「寺山修司全シナリオ」に掲載されたものを参照した
- (7) 寺山修司「瓶詰めの猿論」「映画評論」一九六〇年 一二月月号「映画評論」の時代」カタログハウス 二〇〇三年 三九七頁
- (8) 中原弓彦は映画評論家としても有名で、映画に関する著作も多い小林信彦の別名である。「映画評論」の一九六一年一月号には寺山の反論に対する中原の反論「贗者の季節」が掲載されている
- (9) 中原弓彦「映画評論」一九六〇年 一〇月号巻頭言
- (10) 同書
- (11) 寺山修司「瓶詰めの猿論」
- (12) 同書 三九七頁
- (13) 同書 三九七頁
- (14) 寺山修司「映画作家への手紙」「シナリオ」一九六三年 一月号 一三五頁
- (15) 寺山修司「瓶詰めの猿論」三九七頁
- (16) 同書 三九七頁
- (17) 同書 三九八頁
- (18) 同著 三九七、三九八頁
- (19) 寺山のテロリスト観、ヒトラー観は高取英の「寺山修司論」創造の魔神」長尾三郎の「虚構地獄 寺山修司」等に詳しくかかれている。
- (20) 佐藤重臣「乾いた湖」評「映画評論」一九六〇年 一〇月号「現代日本映画論大系 日本ヌーベルヴァーグ」冬樹社 一九七〇年 二八四頁
- (21) 佐藤重臣 二八四頁
- (22) 寺山修司「瓶詰めの猿論」三九七頁
- (23) 座談会「現代を描く新しいシナリオ」「キネマ旬報」一九六一年二月下旬号 五〇―五一頁 出席者は映画評論家の岡田晋、シナリオライターの白坂依志夫、山田信夫、寺山修司、安藤日出男、寺田信義の計五人。

- (24) シナリオ「一九歳のブルース」あとがき「シナリオ」一九六〇年八月号 一〇六頁
- (25) 座談会「現代を描く新しいシナリオ」五五頁
- (26) 同書 五五頁
- (27) 同書 五六頁
- (28) 寺山修司「声の設計・セリフ考」「キネマ旬報」六一年 七月上旬号 九八頁
- (29) 同書 九七頁
- (30) 同書 九七頁
- (31) 同書 九八頁
- (32) 寺山修司 戯曲「血は立ったまま眠っている」作品ノート「寺山修司の戯曲三」思潮社 一九八四年 三二九頁
- (33) 寺山修司「自由奴隷の市」「シナリオ」六一年 四月号 六三―六四頁
- (34) 同書 六四頁
- (35) 同書 六四頁
- (36) 同書 六四頁
- (37) 寺山修司「瓶詰めの猿論」三九九頁
- (38) 寺山修司「自由奴隷の市」六五頁
- (39) 同書 六五頁
- (40) 同書 六五頁
- (41) 大島渚の四作目で一九六〇年一〇月に公開された「日本の夜と霧」は安保敗北後の左翼内部の論争を扱った映画で、そのあまりにも政治的な内容に松竹は公開四日目にして上映を打ち切るといった事件があった。これが原因で大島は松竹を退社、松竹はヌーヴェル・ヴァーグ路線を完全に打ち切った。
- (42) 【猫学—Calligay】は寺山がブニエルの「アンタルシアの犬」に影響を受けて作ったと言われている映画であるが、フィルムが現存していない。ピルの屋上から一〇〇匹の猫を次々と落とすのを撮影したものだといわれている。